

## 社長メッセージ



日本赤十字社  
社長 近衛 忠輝

本日、記念すべき第50回日本赤十字社医学会が、日本赤十字社にとっても、私自身にとっても縁<sup>ゆかり</sup>の深いここ熊本で開催されますことをお慶び申し上げます。西南戦争において激戦の舞台となった熊本はまた、日本赤十字社の前身である「博愛社」が、征討総督であられた有栖川熾仁親王から創設のご裁可をいただいた地でもあります。災害や紛争が起こると血が騒ぎ、勇んで国内外を問わず救援に駆けつけたいという熊本日赤の関係者の意気込みは、そうした歴史の故かもしれません。いずれにしても被災者のもとに「真先に、そして最後まで」という心掛けは、全ての赤十字関係者のお手本であり、誇るべきことだと思います。

日本赤十字社は、医療、血液、福祉、国際救援、ボランティア、青少年、義援金募集などに広く深く関わっています。これらの施設や職員やボランティアが全国のネットワークを活かし、一丸となって活動できる機会が災害救護であり、東日本大震災後の日赤の活躍ぶりは世界の赤十字・赤新月社からも賞賛を受けました。しかし現場で救護班が存分に力を発揮できたのは、手厚い後方支援があつてのことです。日頃から、それぞれの地域で各赤十字病院が地道な医療活動を展開して、地域住民の信頼を勝ち得ていればこそできたことでした。多くの義援金が国内外から日赤に寄せられ、ボランティアが集まったのも、多彩な活動を通じて赤十字マークへの厚い信頼があつたからでしょう。いざ災害という時に、どれだけの人々を救え、どれだけの活動が出来るかは、日々の活動によってのみ勝ち取る事が出来る人々の信頼とサポートにかかっています。

日赤医学会は長年医療職中心でしたが、今ではあらゆる職種が参加しています。年間国内だけでも大小40もの災害の救護に関わっている組織は、日赤をおいてありません。そして日赤がこれまでに蓄えてきた豊富な経験を踏まえ、持てる人的物的資源と全国のネットワークを効果的に生かすならば、果たし得る役割は限りなく大きなものとなるでしょう。この医学会が、その可能性を更に究める場と機会となることを期待しています。